

資料

性・外国人ステレオタイプの心理実験による検証： 仮想クイズ大会のパートナー選好を通して^{注1}

守 一雄・唐澤 勇利・松本 衿奈

An Experimental Examination of the Gender and Xenophobia Stereotypes
in Japanese Undergraduates:

Through Partner Selections for an Imaginal Quiz Competition

MORI Kazuo, KARASAWA Isari, MATSUMOTO Erina

要 旨

差別に関する研究では質問紙調査は使えない。回答に社会的望ましさの歪みの影響が避けられないからである。本研究では、Monin & Miller(2001)が用いた仮想的な場面での選択行動を指標にすることで、質問紙調査では明らかになりにくい、性ステレオタイプと外国人ステレオタイプの検証を試みた。仮想的な選択行動としては、クイズ大会に2人組で参加する場合のパートナーを選好するという状況設定をした。また、あらかじめステレオタイプに関する質問に答えさせることで、「道徳の貯金箱効果」の検証も行った。被験者には松本大学1、2年生40名(男子20名、女子20名；年齢18-20歳)を用いた。実験の結果、どちらのステレオタイプの存在も検証できなかった。

キーワード

性ステレオタイプ、外国人ステレオタイプ、道徳の貯金箱、実験的検証

目 次

- I. はじめに
- II. 差別問題への心理学的アプローチ
- III. 性ステレオタイプと外国人ステレオタイプの検証実験
- IV. まとめ

I. はじめに

1. 差別とステレオタイプ

「黒人の命も大切だ(Black lives matter)」という言葉が2020年のアメリカで流行った。これはアメリカの警察官による黒人に対する過剰と思われる暴力行為によって死に至らしめられた事件に対する抗議行動での標語であった¹⁾。同年の女子テニス全米オープンで2度目の優勝をした日本人テニス選手大坂なおみさんも、この抗議行動に賛同し、決勝までの毎試合で犠牲となった黒人の名前を書いたマスクをして会場に登場したパフォーマンスも話題となった²⁾。

守は1995年に当時人種差別であるとして絶版になっていた絵本『ちびくろサンボ』の改作版『チビクロさんぽ』を出版したことがあった³⁾。その際、国内だけでなく海外のニュースメディアに取り上げられた^{4,5)}。また、日本の子どもたちがこの絵本を差別的視点から楽しんでいるわけではないことを心理学実験で明らかにした論文^{6,7)}も公刊していた。こうした経緯から、海外のニュースレポーターから「黒人の命も大切だ」行動について電話取材を受けた^{注2)}。しかし、日本にも部落差別やアイヌ民族差別という暗い過去が存在するが、欧米における1世紀近い黒人奴隷制度ほどの根深いものではない。近代の中国人や朝鮮人差別にしても、20世紀初めの一時期的ことであり、長い歴史で見れば、中国や朝鮮半島の人々は差別するよりも師として教える存在であった。

差別問題はその深刻さの程度に極めて大きな違いがあるだけでなく、歴史や文化、そして日常生活にまでその影響が及んでいることに留意する必要がある。学校教育を通して、種々の差別問題をなくしていく努力が続けられてきているが、一度社会に染み込んでしまったことの修正や改善には時間がかかるであろう。

差別とまでは言えないものの、知らず識らずのうちに、私たちの考えや行動に影響を与えている「差別的」な偏見はステレオタイプと呼ばれている。例えば「男は度胸女は愛嬌」という表現には社会が求める男らしさや女らしさが凝縮されている。そして、そうしたステレオタイプに気づかないままにいる

と、いつまでもステレオタイプは生き続けることになってしまう。現代の日本における差別問題は、欧米における黒人差別問題よりも、もっと軽度ではあるが、それゆえに無自覚なままに社会に広まっているステレオタイプであると考えられる。本研究では、そうしたステレオタイプのうち、性差別に影響を与える性ステレオタイプと外国人差別につながるおそれのある外国人ステレオタイプに焦点をあて、自覚されにくいステレオタイプの存在について実験的に検証を試みたものである。

1) 日本は男女格差が大きい国

日本は世界的に見て男女格差が大きい国である。『世界ジェンダーギャップ報告書』では世界153カ国を対象に各国のジェンダー格差を数値化しランキングにしている⁸⁾。そのランキングでは日本の順位は121位という低い順位となっている。先進7カ国(G7)の中では最下位の順位である。この報告書では指数を計る上で、経済、政治、教育、健康の4つの分野からデータが作成される。この中で日本は経済と政治のスコアが低く、順位では経済(115位)、政治(114位)となっている。つまり、男女間での収入の比率と、政治参加の比率において男女の大きな格差があるということである。

しかし、このように日本が男女格差の大きい国であるということを実感している人は少ないのではないだろうか。海外での生活経験がある人であればその国との比較もできるかもしれないが、生まれてから日本に住み続けている人の場合は実感が薄いかもしれない。その結果、私たちは男女格差が大きいとされる社会に慣れている中で、無意識のうちに男女差別を行っている可能性があるのである。

男女差別の問題は、小学校社会科の主権者教育においても改善が試みられている。秋田⁹⁾は、日本における女性議員の比率が国際的に見て低いことを改善するための方策として、小学校6年生社会科の授業でクォータ制を導入することの是非を考えさせている。さらに、そうした授業をすることで、子どもたちの女性観に変化があるかどうかを「潜在連想テスト」で調べる新しい試みを提案している(「潜在連想テスト」については、後述する)。

2) 日本における人種差別

今日の日本において「人種差別(racial discrimination)」は存在していないのだろうか。日本は「あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約」いわゆる「人種差別撤廃条約」を1995年に批准し、今年で25年目になる。この条約における人種差別とは「人種、皮膚の色、世系又は民族的若しくは種族的出身に基づくあらゆる区別、排除、制限又は優先であって、政治的、経済的、社会的、文化的その他のあらゆる公的生活の分野における平等の立場での人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを妨げ又は害する目的又は効果を有するもの」としている。

2020年11月、NIKE JAPANが公表した動画が物議を醸した。NIKE JAPANは、「前向きな変化を促すスポーツの力を賞賛し、日本の全てのアスリートたちが直面するバリアを打ち破ることを目的」とするPR動画を発表した¹⁰⁾。

しかし、この動画に対して、NIKEのコンセプトに賛同する意見もある一方、多くの批判的意見がSNS上で見られる。とりわけ、在日問題に悩む少女の描写に対して、多くの批判的コメントが寄せられている。YouTube上に寄せられたコメントを見ていくと、本名のキムを名乗らず山本姓で過ごしている場面や、韓服を着ると周囲から好奇な目で見られていると感じている場面に対して、不快に思う人が多いようである。NIKE JAPANは実体験を基にしたストーリー動画であるとしているため、批判的コメントをした多くの人が「日本で韓国(朝鮮)人差別が起きている」と捉えていると考えられる。

1965年の日韓国交正常化から今年で55年を迎えた。過去に日本が韓国を統治していたという歴史もあり、複雑ではあるが、海を挟んだ隣国として重要な関係を築いてきた。現在、日本と韓国が抱えている問題として、竹島の領土問題、慰安婦問題、徴用工訴訟問題などがある¹¹⁾。また、韓国と同じく朝鮮半島にある北朝鮮との問題は、日本人拉致問題やミサイル発射実験の問題などが挙げられる¹²⁾。これらの問題に対して、日本ではしばしばニュースでも取り上げられ、関心をもつ人も多い。今回のNIKE JAPANの動画に対する批判コメントも、国が抱えている政治的問題と結び付けて考える人が多かったと思われる。

3) 古典的レイシズムと現代的レイシズム、クセノフォビア、ステレオタイプ

高・雨宮¹³⁾によれば、McConahay¹⁴⁾は「古典的レイシズム(Old-Fashioned Racism)」とは被差別民族は能力や倫理観が劣っているという偏見のことであり、「現代的レイシズム(Modern Racism)」とは、差別は解決しているにもかかわらず被差別民族が恵まれていなかったり権利を求めたりするのはただの怠惰であり本人の責任であるという偏見のことである、としている。現代的レイシズムは、周囲が気づかないだけでなく、これを抱えている本人にとっても偏見であると自覚しにくいという特徴がある。このような目に見えない自覚しにくい偏見や差別を指摘することが差別や偏見の解消に繋がると高・雨宮は提唱している。一方で、周囲も本人も自覚することのできない差別心を引き出すのは容易ではない。

日本における人種差別や民族差別は、必ずしも差別心だけのせいとは言えない側面もある。それは、日本社会のように同質性が高い社会では異質な存在を忌避する傾向があり、それは人種差別(racism)とは異なる「外国人嫌悪(xenophobia)」である可能性もある。これは単に見知らぬ人を恐れるという傾向にすぎない。本研究では、外国人として韓国人を想定した実験を行う。そこで、そもそも「人種」差別ということにもならない。日本人と韓国人は同じ人種だからである。

また、差別問題で考慮すべき別の側面は他の人種に対する偏見である。そうした偏見は多くの場合ステレオタイプとして存在し、私たちの行動を無意識のうちに「差別的」なものにしている。例えば「外国人は犯罪を犯しやすい」というステレオタイプがあるために、外国人を恐れる「外国人嫌悪」が生じ、それが先鋭化すればアパートを貸さないなどの差別的な行動にまでつながる。

前節で述べた男女差別に関してもステレオタイプが存在する。ステレオタイプは「社会通念」として存在しているものであるため、知らず識らずのうちに私たちの行動や価値判断に影響をあたえてしまう。その結果、差別心を持っている自覚がない場合でも、結果的に差別的な行為を行ってしまうことが起こる。そうした意味で、ステレオタイプの存在は無自覚的であることでかえって差別問題の解決を難しくしているものと言える。

3. アンケート調査の限界

ステレオタイプを含む人種差別などの問題を心理学的に研究する際に最も広く使われるのがアンケート調査(質問紙調査)である。しかし、アンケート調査を行っても、必ずしも本心を答えるとは限らない。被験者が実験者に対して「私は差別心など持っていない」と思わせるような回答を行うかもしれないからである。また、アンケートの内容から、差別心を測るものであると被験者が予想し、非差別者としての模範的な回答を行う可能性も考えられる。このように通常のアンケート調査では被験者の真意を知ることができない。

内田・守¹⁵⁾は、アンケート調査の限界を以下のようによまとめている。

1) アンケート調査は、基本的に回答者が嘘をつかないことを暗黙の前提にしているだけであって、回答者が嘘をつこうとすれば、いくらでも嘘をつけるやり方なのである。

2) アンケートでは回答者の意識的な回答しか調べられない。私たちは、自分自身がどのように考え、どのように行動しているかを自覚していると考えている。しかし、「無意識に何かをした」ことさえ意識できていない場合や、「意識的にしたつもり」にもかかわらず、実は「無意識的にしていた」という場合も考えられる。

このように、アンケート調査には実施するのに容易であるという利点がある一方、回答者が見栄を張り、嘘をつく可能性があることや、回答者の潜在的意識まで測ることができないという欠点を持っている。そのため、アンケートを差別問題やステレオタイプの実態調査に用いることには限界がある。

II. 差別問題への心理学的アプローチ

1. 潜在指標の開発

心理学の研究として差別をテーマにしてきたのは、社会心理学者であった。社会心理学者は当初はアンケート(質問紙調査)を主たる研究方法としたが、すぐに上述のような問題点に気づくこととなった。そこで、アメリカの社会心理学者Greenwaldら

は、アンケートの限界を補うための新しい測定手法として「潜在連想テスト(Implicit Association Test: IAT)」を開発した¹⁶⁾。このテストは、2つの課題を組み合わせ、それぞれの課題における反応時間をミリ秒単位で測定することにより、被験者の潜在連想構造をあぶり出すものである。

また、これもアメリカの社会心理学者のPayneらは、認知心理学で研究されてきたプライミング(priming)という手続きを応用して、被験者の深層を探る新しい方法を開発した¹⁷⁾。Payneらが用いた方法では、漢字の好悪判断課題が用いられる。漢字は、一般のアメリカ人にとっては「複雑な無意味の記号」にすぎないため、好悪の判断はほぼランダムになされる中立的なものと考えられる。ところが、漢字の好悪判断をさせる直前に、いろいろな写真を提示すると、漢字の好悪判断が影響を受ける。赤ちゃんの写真など誰もが好むような写真が見せられたあとでは、中立なはずの漢字まで好ましいものと判断されてしまうのである。面白いことに「意識できないくらい短時間しか提示しない」場合でも、この効果が見られる。さらには、意識できるような場合に「写真は無視するよう」に指示をしたとしても、同様の効果が起こることが知られている。こうした現象がプライミングであり、先行して提示される写真などが「プライム(prime)」と呼ばれる。そこで、Payneらはこのプライミングを利用して、プライムに対する好悪を調べることができると考えたわけである。Payneらは、この測定方法に「感情誤帰属手続き(Affection Misattribution Procedure: AMP)」と名付けたが、論文のタイトルは「態度測定のためのインクブロットテスト(An inkblot for attitudes)」とされた。これは「深層心理を探るテスト」として広く知られているロールシャッハテストの別名である「インクブロット(インクのシミ)テスト」のもじりであった。

NosekとBanajiは、認知心理学で行動抑制機能の検査に活用されていたGo/NoGo課題を態度測定に応用したGNAT(The Go/No-go Association Task)という別の手法を提案した¹⁸⁾。「Go/NoGo課題」とは、特定の刺激が提示された時だけに「できるだけ速くGo反応をする」ことが求められるような課題である。例えば、パソコンの画面にいろいろな言葉が提示され「好ましい言葉の時だけボタンを押す(=

Go反応)」ように求められる。ここで、この課題に黒人と白人の写真を混ぜて提示し「黒人(または白人)には“Go反応”する」ようにすると、黒人や白人に対する潜在的な態度が「反応の正確さ」として測定できるわけである。NosekとBanajiは、Greenwaldと共にIATの開発にも加わっており、このGNATはIATでの「分類(=2つのキー押し)」を「1つのキーを押すか押さないか」に置き換えたものと考えられる。また、GNATでは反応の正確さ(=正答率)を計測するだけなので、IATのように反応時間を計測するような測定機器を必要としない利点がある。

これらの潜在指標のうち、最も広く活用されているのはIATであるが、反応時間測定のために被験者一人一人にパソコンが必要であり、学校教育場面などでの活用には適していない。好悪判断を指標とするAMPも、プライムをサブリミナル提示するにはパソコンと特別なソフトウェアが必要である。反応の正答率を計測するだけのGNATは特別な機器を必要としない利点があるが、アンケートのようにクラスで一斉に実施できるわけではない。それでも、MoriらはIATやAMPを集団で実施できるように改変した手法を提案している^{19,20)}。

2. 行動指標の活用

「心理学の父」として知られるW.ブント (Wilhelm M. Wundt[1832-1920])がライプチヒに実験室を開設して以来、近代の科学的心理学の歴史は「心の働き」をいかにして「行動指標」で明らかにするかという研究手法の開発の歴史であった。特に、アメリカの心理学者J.ワトソン(John B. Watson [1878-1958])が提唱し主導した「行動主義(Behaviorism)」の考え方は、今も科学的心理学の基本的な研究手法となっている。例えば「お腹がすいているか」という質問には嘘がつけたとしても、実際に食べる行動には嘘がつかない。それならば、質問紙で差別やステレオタイプについて尋ねる代わりに、具体的な行動を調べればよいということである。社会心理学の研究に限らず、質問紙調査を使った研究以外のほとんどの心理学の実験的研究が行動指標を活用した研究である。そこで、ここでは本研究のモデルとなったMonin & Millerの研究²¹⁾を紹介することで研究例の紹介に代えることとしたい。

Monin & Millerは大学生202人(男子学生115人、女子学生87人)に対して、性差別の存在を検証する実験を行った。まず、被験者に「女性は、本当は賢くない」のように女性に対してネガティブな文章を読んでもらい、それが正しいか間違っているかを考え、回答してもらった。ここでは「間違っている」という回答が予想される。

次に、2つ目の課題を与える。被験者に、建設業の経営者であると仮定したシナリオを読んでもらい、事業拡大のために新しく支店長候補を雇う場面を想定させる。そして、この建設業の支店長候補には、性別による向き不向きがあるか否かの判断をしてもらうのである。すると、最初の課題では性差別的な文章を「間違っている」と回答したにもかかわらず、この課題では男性ステレオタイプに引きずられた判断をしてしまう被験者が多いことがわかった。つまり、単純なアンケート調査では「社会的に望ましい回答」をしていたとしても、架空の状況とはいえ、なんらかの判断をする際には差別的な行動をとってしまうことが示されたわけである。

この研究では、アンケートで社会的に望ましい回答をすることが、かえって差別的な行為を引き起こしやすいことも見出した。この研究では女性に対してネガティブな文章に「一部の」と「ほとんどの」という限定詞を付加することで、より差別的な文章(「ほとんどの女性」とそれを緩和したもの(「一部の女性」)の2通りを用意した。すると、より差別的な文章の方が「間違っている」という回答を被験者の多くがすることとなった。ところが、こうした差別を否定する回答をした被験者の方が、次の判断課題ではむしろ差別的な判断をしたのである。この現象は「道徳の貯金箱」と名付けられた。人は、道徳的に良いことをした後では、少しくらい非道徳なことをしてもよいと考えてしまう。あたかも、道徳的な行為がお金のように貯金できると考えているかのようだというわけである。

Ⅲ. 性ステレオタイプと外国人ステレオタイプの検証実験

1. 実験の目的と概要

差別をしているかどうかを単純にアンケートなど

で尋ねたのでは、本心を回答するとは限らない。また、明確な差別心を持っていなくても、無意識のうちに差別的行為をしていることに本人自身が気付いていない可能性もある。そこで、Monin & Millerが用いたような、状況設定をした上で、具体的な行為の選択をさせてみるという手続きが有効になる。

本研究では、差別をしていないという認識を持ちながらも、実は「差別行為」を行っているかどうかを、具体的な行動を指標にして検証してみる。具体的には、松本大学の学生を被験者にし「知的クイズ大会のパートナー選び」と称して、男女3人ずつの顔写真を示し、「男性の方が知的である」というステレオタイプに影響された選択がなされるかどうかを検証する。また、選択肢の中に韓国人名のついたものを含めることで「外国人忌避ステレオタイプ」の存在の有無も確認できるようにする。

これに加えて「道徳の貯金箱」効果の検証も行う。この効果を検証するためには「差別的でない回答を引き出すような質問」が含まれるものと「差別的な回答を引き出すような質問」が含まれるものの2種類のアンケートを用意して、半数ずつの被験者に割り振る必要がある。しかし、本研究では被験者数に限りがあることを考慮して「差別的でない回答を引き出すような質問」が含まれるアンケートだけを使うこととした。そこで、被験者はアンケートでは「男女差別をしない」や「外国人差別をしない」と回答するようにさせるが、パートナー選びにおいては男性や日本人を選択しがちになるのではないかという予想を実験で検証することとした。

2. 実験材料の準備

1) 事前アンケート項目の作成

性差別や外国人差別に関する質問で「差別をしていない」という回答を引き出すような質問を用意した。質問は「はい」か「いいえ」の二択で回答できる単純なものとし、実験の意図を推測させないために、ダミーの質問も8問用意し、ダミー8問、差別に関する質問2問の計10問からなるアンケートを作成した。

1. 明日は今日よりいい日になると思う。
2. 考えすぎて裏目に出ることがある。
3. 朝起きるのがつらい。
4. 人をうらやましく思うことが多い。

5. 自分はきれい好きだと思う。
 6. 家族とは仲が良い方だ。
 7. 争いごとはない方がいいと思う。
 8. 自分はどちらかというと論理的な方である。
 9. 男の方が女より頭がいいと思う。
 10. 日本人の方がアジア人より知的であると思う。
- (9、10の質問が差別の有無を測る質問である。)

2) パートナー選択用の顔写真

松本大学教育学部4年生の有志(男子7名、女子5名)から写真を提供してもらい、プライバシー保護の観点から、顔を合成して架空の人物の顔を使うこととした。性差別のための顔写真はこの合成だけで十分である。また、外国人差別の検証に使う写真も、韓国系の人物の顔はこの日本人の顔を合成したもので通用すると考えた。ただし、写真それぞれに「架空の名前」を付け「日本的な名前」と「韓国的な名前」という違いによって、その写真の人物が日本人か韓国系の外国人かがわかるようにした。

合成にはFace App²²⁾というアプリを使い、男子×男子、女子×女子、男子×女子と組み合わせを変えて行った。2人の写真を用いて合成を行ったが、合成するベースを変えると違う顔になったので、1ペアから2枚の写真を得ることができた。また、実験者のスマートフォンに内蔵のSamsung Gallery²³⁾を使って背景を統一した(図1参照)。韓国人名はインターネットで韓国に多い苗字や人気の名前を検索し、組み合わせつけた。顔写真は男女3人ずつとしたが、韓国人の選択では日本人名5人韓国人名1人とした。

写真提供に同意をしてくれた12名から計20枚の顔写真を撮影し、合成して30人分の「架空人物の顔写真」を作成した。さらに、その写真から別の学生数名に「賢そう(勉強できそう)な顔」を選んでもらい、選択頻度の高かったものから順に24枚を使った。これら24枚を使って6人ずつの写真を並べた選択肢画面を4枚分作り、パートナー選択を4回繰り返すこととした。また、特定の顔写真の影響や位置の影響をカウンターバランスするため、同じ24枚の写真を使って、架空の名前や並べる順番を変えた4パターンを用意した。

3) 実験実施用パワーポイント

新型コロナウイルス感染防止対策のために実験はMicrosoft Teamsを使ってオンラインで実施するこ

ととした。実験手順はすべてパワーポイントスライドとしTeamsのビデオ会議機能を使ってスライドを提示しながら画面の文字を読み上げて被験者に適宜回答を求める形式とした。

実験のタイトルは「対戦型クイズによる新しい知能テスト開発のための予備実験」とした。パワーポイント全体の構成については以下の通りである。a) 実験協力への感謝、b) 事前説明、c) 実験日程の説明、d) 事前アンケート、e) クイズ大会についての説明、f) パートナー選択(4回)、e) 顔写真、d) 事後説明である。

「クイズ大会」は実際には行わないが、被験者には具体的な説明をすることで実施されることが予想できるように以下のような配慮をした。大会の日程については参加者全員の回答が終了した後に伝えること、大会上位入賞者には景品が用意してあることを伝える。クイズ大会で出題されるクイズ問題を2問例示する。この例題はSPIテストに用いられそうなものと、図形の規則性を見出して解答するような論理的な問題を用いる。クイズ大会は2人組対2人組の対戦型で行うことを告げ、パートナーとして一緒に戦いたい人を表示される顔写真から選ぶよう指示する。パートナー選択は希望通りにならない可能性があることも告げ、そのために各スライドで第2希望までを選択させ、また同様の選択を4回繰り返し、各被験者から8名分の選択データを採取できるようにする。

4) その他の準備

実験を実施するにあたって、実験の内容が研究倫

理基準に適合したものであるかどうかを、2020年10月29日に松本大学研究倫理委員会に審査を依頼し、2020年11月4日付けで承認を受けた。(研究実施責任者：守一雄、承認番号第111号)

3. 実験の実施手順

1) 実施日 2020年11月13-27日

2) 被験者 松本大学教育学部1、2生34名(男子17名、女子17名；年齢18-20歳)、「知の技法」を受講している1年生6名(男子3名、女子3名；年齢18-19歳)
実験者 松本・唐澤が分担して実験を担当した。主に男性被験者には唐澤が、女性被験者には松本が対応した。

3) 実験実施形態

a) オンライン実験 新型コロナウイルス感染対策のため、実験はTeamsの通話機能を使ってオンライン通話形式によって実施した。パワーポイントスライドを実験者に共有をし、見てもらいながら回答してもらった。実験の様子は音声のみをWindowsボイスレコーダーを使って、被験者から了承を得た上で録音し、後で確認できるようにした。

b) 対面実験 後期から大学内で対面での授業が行えるようになり、被験者の学生の多くは対面での実験を希望した。よって、新型コロナウイルス感染対策として、実験者と被験者の距離や座る場所、閉鎖された空間では行わない等に考慮しながら実験を行った。また、実験者と初対面の被験者が多かったので、閉鎖的な空間より開放的な廊下の学習スパー



図1 パートナー選択に用いた顔写真スライド(4枚のうちの1枚)

表1 差別的アンケートの回答結果

アンケートの回答		被験者 男	被験者 女	合計
「9. 男の方が頭がいい」	(はい)	3	4	7
	(いいえ)	17	16	33
「10. 日本人の方が知的である」	(はい)	4	5	9
	(いいえ)	16	15	31
合計		20	20	40

スの方がよいだろうという配慮もした。対面では、パソコン上に表示したパワーポイントスライドを直接見てもらいながら回答をしてもらった。こちらの音声もオンライン同様にWindowsボイスレコーダーを用いて録音した。

4)実施手続き 実験は、以下の手順で実施した。a)実験協力依頼メールの送信、実験協力依頼の直接の声掛け、b)実験への参加と録音についてのインフォームドコンセント、c)差別内容を含めた事前アンケート調査、d)名前付き顔写真からのパートナー選択、e)謝辞と実験内容の説明。実験協力の謝礼として大学生協で使用できる金券400円分を渡した。

4. 実験結果

1) 実験結果とその分析

a) 差別事前アンケート結果

事前アンケートの「9. 男の方が女より頭がいいと思う。」と「10. 日本人の方がアジア人より知的であると思う。」に対する男女別の回答結果は表1に示す通りである。どちらの質問でも差別的な回答をした被験者は全体の4分の1以下である。この結果を、直接確率計算(二項検定)を行ったところ、男子も女子も、また全体としても「いいえ」と答えることが有意に多いことが確認された(性差別：男子 $p=0.012$, 女子 $p=0.041$, 全体 $p=0.001$ 。外国人差別：男子 $p=0.0026$, 女子 $p=0.0118$, 全体 $p=0.0000$, すべて両側検定)。

こうした差別に関する質問に対して「いいえ」と答える回答が多いことを想定して設問を用意したので質問内容は適切であったと考えられる。男女に偏りがなく、直接確率計算(Fisher's exact test)で確認した(両側検定： $p=0.7037$, $p=0.7253$, ns)。

表2 パートナー選択 男女別

パートナー選択	被験者 男	被験者 女	合計
男性	99	39	138
女性	61	121	182
日本人男性	43	19	62
日本人女性	26	51	77
韓国人男性	5	2	7
韓国人女性	6	8	14
合計	160	160	320

b) パートナー選択結果：男女

スライドに表示された6人の顔写真の選択結果は表2(上段)に示す通りである。表2より、男性被験者は男性を、女性被験者は女性を選択する確率が高いことがわかる。このことは、統計的に有意差が認められる(カイ二乗検定, $\chi^2_{(1)}=44.351$, $p<0.01$)。

c) パートナー選択結果：韓国人名の選択されにくさ

日本人名、韓国人名が混在した6人の顔写真からの選択における実験結果は表2(下段)に示すとおりである。提示した6人の顔写真のうち、韓国人と判断できる名前をつけてあったものは1人だけであった。確率的に考えても、韓国人男性や韓国人女性を選択される割合は、日本人男女を選択する割合よりも少なくても当然である。

そこで、日本人と韓国人の母比率をそれぞれ5/6と1/6として、韓国人名の写真をパートナーとして選択すること(21/160)が少なかったかどうかを母比率不等直接確率計算により調べてみた。その結果、観測された21/160(=0.13)は母比率1/6(=0.167)よりも小さいが、統計的に有意とは言えなかった($p=0.1328$, ns)。男女別に同様の分析を行ってみたが、

表3 差別質問への回答とパートナー選択での差別的選択

実験条件	「9. 男の方が頭がいい」への回答		合計
	差別的(はい)	非差別的(いいえ)	
パートナーの選択			
男性を選択	20	118	138
女性を選択	36	146	182
合計	56	264	320
「10. 日本人の方が知的である」への回答			
	差別的(はい)	非差別的(いいえ)	合計
パートナーの選択			
2回とも日本人だけを選択	5	15	20
1回は韓国人を選択	4	16	20
合計	9	31	40

11/80(男性被験者)も10/80(女性被験者)も母比率(1/6)に比べ、特に少ないとは言えないことがわかった(男性 $p=0.2968$ 、女性 $p=0.1980$ 、どちらもns.)。

上述のように、日本人のパートナーを選択する際に、男性被験者は男性を女性被験者は女性を選択する傾向が見られた。同様に韓国人を選ぶ場合にも、女性被験者は韓国人女性を選ぶことが多かったが、男性被験者は韓国人男性を選ぶわけではなかった。ただし、サンプル数が小さいため、こうした傾向については統計的に分析をすることはしなかった。

d) アンケートの回答とパートナー選択での差別的選択結果

事前アンケートで「非差別的な回答」をしたことが、その後のパートナー選択で「差別的な選択」を誘発しやすいかどうかを検証するために、事前アンケートの回答とパートナー選択の両方をクロス集計した結果は表3に示すとおりである。上段の性ステレオタイプについてカイ二乗検定で確認したところ、統計的有意差は検出されなかった($\chi^2_{(1)}=1.176$, ns)。

外国人ステレオタイプについては、40名の被験者ごとに「2回の選択機会のうち1回でも韓国人を含む選択をした場合」は「韓国人を選択」と分類した。アンケートの回答とパートナー選択に偏りは見られなかった(直接確率計算: $p=0.7253$, ns)。このことか

ら、本研究では「道徳の貯金箱」現象は観察できなかった。

e) 特定の顔写真、特定の位置が選ばれた可能性の検討

写真を選択させる状況では、人は通常、その顔つきや表情を重視すると考えられる。もし「特に選ばれやすい顔つきや表情をした写真」があれば、日本人か韓国人かにかかわらず選ばれる可能性がある。こうしたバイアスを避けるために、本実験では写真の提示位置や氏名を変えたバージョンを4通り用意して、被験者間でカウンターバランスしていた。しかし、そうしたカウンターバランスが十分でなかった可能性は残る。そこで、顔写真ごとにパートナー選択された回数を集計し、特定の顔写真が選ばれやすかったかどうかを確認した。その結果、カイ二乗検定で有意差が見られた($\chi^2_{(23)}=35.472$, $p<0.05$)。しかし、ライアンの名義水準を用いた多重比較では有意差は見られなかった。

念のために、顔写真の並んでいる場所による選ばれやすさがあつた可能性についても確認してみた。パワーポイントスライドの写真の場所ごとの選択頻度の偏りをカイ二乗検定で検証したが、有意差は見られなかった($\chi^2_{(5)}=6.961$, ns)。以上のことから、特定の顔写真が著しく選択されたり、顔写真の提示場所によって選択に大きな偏りがあつたりしたために、実験結果に影響が及んだ可能性はないと言

える。

IV. まとめ

1. 研究結果の解釈：2つの側面から

本研究では、潜在的な差別ステレオタイプが選択行動で顕在化することを心理実験によって明らかにすることが目的であった。しかし、実験の結果、統計的に有意とはならなかった。この実験結果をどう解釈したらいいだろうか。実験結果の解釈には、少なくとも2つの側面からの検討が必要である。まず、実験が失敗であったというもの(解釈1)である。これは、仮説は正しかったが実験の方法や手続きなどに不十分な点があったために仮説が検証されなかったという解釈になる。そして、もう一つは実験結果が実験仮説とは一致しなかったが、それぞれが現実を反映しているものであると考えるもの(解釈2)である。以下では、それぞれの解釈について検討をしてみた。

2. 解釈1: 実験方法が不適切であった可能性

本研究が「失敗であった」とすると、その原因として以下の3つのことが考えられる。1つ目は、被験者の人数が少なかったことである。当初80人の被験者を用意することを予定していた。しかし、思ったように被験者が集まらず、やむを得ず予定していた半分の40人にした。被験者数の少なさが実験の結果に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

2つ目は、事前アンケートの段階で「道徳の貯金箱」効果を十分に被験者に与えることができなかったことが考えられる。今回、2種類の差別ステレオタイプに関する質問を用意していた。10問の質問のうち2問を差別的質問にしたが、2問だけでは内容的にも質問数も不十分だったのかもしれない。

3つ目は、男女差別と外国人差別のステレオタイプ顕在化実験を同時に行うことに問題点があった可能性である。被験者に男女差別、外国人差別を測るための実験であることを悟られないようにするために、事前アンケートの質問項目やパートナー選択の写真の男女比、人種比に配慮したつもりでいた。し

かし、実験状況が複雑になり、短い実験時間では十分にパートナー選択の状況を現実的なものにできなかったのかもしれない。

3. 解釈2: ステレオタイプが存在しなかった可能性

実験結果をそのままに解釈すると、松本大学教育学部の1、2年生は性ステレオタイプも外国人ステレオタイプも持たないということになる。「はじめに」で述べたように日本ではまだ性差別が残っていることは否定できない事実である。しかし、戦後の学校教育では一貫して男女が平等であることが教育されてきた。過去には普通に行われていた男女別にクラス名簿を作って、当然のように男児が先に番号付がなされるというような慣行はなくなった。クラス代表が男子であるようなことが当然視されていたが今はそうしたこともなくなり、現に、松本大学2017年度入学生の入学式での新入生代表挨拶をしたのも女子学生であった。

それでも、優秀な女子学生が自由に大学進学をできるようになったとは言えないことも事実である。それを示す具体的な事例として、2017年度から東京大学では女子学生だけを優遇する措置を取り始めた。これは、地方出身の女子学生に対して月3万円の家賃支援をするというものである。この背景にあるのは、優秀な学生であっても女子学生は地方から東京の大学に進学することが経済的に難しいことがあるという²⁴⁾。

こうした現象は皮肉なことに、地方の大学に優秀な女子学生が留まりやすいことも引き起こしている。上述のように、松本大学でも新入生代表が女子学生であることは多い。実験を実施していた頃に、本学部の大半が受験をした教員採用試験の結果が明らかになったが、正式採用になった12名のうち10名は女子学生であった。採用試験を受験した学生の性比はほぼ半々であったことから、統計的検定をするまでもなく女子学生の方が採用されやすかったことがわかる。

教育学部の1、2年生がこうした状況を知っている、あるいは感じ取っていたとすれば、男子学生をパートナーとして選択することが必ずしもクイズ大会に臨むにあたって有利な選択だとは考えなかった

可能性は十分に考えられることである。だとすると、松本大学の1年生2年生が性ステレオタイプを持っていなかったとしても不思議ではない。1980年代から2000年代の約20年間で性ステレオタイプに関連する女性の性役割期待が男性の役割期待に近づき、性差が著しく減少したという報告もある²⁵⁾。

外国人ステレオタイプが存在しない可能性についても考えてみるべきである。パートナー選択では、特に韓国人名を付けた写真が忌避される傾向は見られなかった。実は、実験の準備段階でも、実際に実験を行う中でも「韓国名日本名まで意識をすることはなかった」という声もよく聞かれた。実験結果も写真に添えられた韓国人を予想させる名前をほとんど考慮せずに、人物そのものに注目していたことを示している。

今回の研究では、顔写真からは外国人と区別が付きにくい韓国人を想定し、韓国人らしい名前をつけることで外国人ステレオタイプの検証を試みた。もし、黒人や白人など、写真だけで外国人とわかるような場合には違った結果が得られたかもしれない。それでも、こうした肌の色などの外見上の違いによる潜在意識については今後の課題としたい。

謝辞 実験にご協力くださった松本大学の1, 2年生、合成写真作成、事前の調査及び実験練習にご協力くださった松本大学教育学部4年生の皆様にご感謝申し上げます。実験に用いたパワーポイントスライドに「いらすとや」さん(<https://www.irasutoya.com/>)のイラストを一部改変して使わせていただきました。ここに記して感謝の意を表します。また、実験の協力者に謝礼として大学生協売店で使える金券を配布しました。この金券をご提供くださいました松本大学同窓会にも感謝申し上げます。

注

^{注1} この論文は、唐澤勇利と松本裕奈の2020年度松本大学教育学部卒業研究に基づいて指導教員の守が執筆したものである。心理学実験の計画、準備、実施、およびデータの分析は守の指導のもと、唐澤と松本が行った。論文の本文は唐澤および松本の卒業論文の文章を活かしながら、守が加筆修正をしたものである。

^{注2} こうした海外レポーターは白人であり、アメリカだけでなく日本でも黒人差別があることをレポートしたいという意図をもって取材をすることが多い。そこで、黒人差別の歴史を踏まえて日米での黒人差別には比較できないほどの差があることを説明してやると、彼らの意にそぐわないため、電話でのやりとりのあとさらに詳しい面談にまで至らない場合が多い。今回の2件の電話インタビューも1回限りで終わり、記事にもならなかったようである。

文献

- ¹⁾ アメリカのテレビネットワークABCのウェブサイト(<https://abcnews.go.com/alerts/black-lives-matter>)にBlack Lives Matterに関するビデオ映像のアーカイブがある。
- ²⁾ アメリカのニュース雑誌TIMEのウェブニュースサイトに“Naomi Osaka Says She Wore 7 Masks About Black Lives During This Year's U.S. Open to 'Make People Start Talking'”(<https://time.com/5888583/naomi-osaka-masks-black-lives-matter-us-open/>)という記事が掲載されている。
- ³⁾ 森まりも、『チビクロさんぽ』北大路書房(1995)
- ⁴⁾ Mori, K. What have we learned from *Chibikuro Sambo*? *Metropolis*, Issue #610, p.58 (2005a).
- ⁵⁾ Wallace, B. Once Shunned as Racist, Storybook Bestseller in Japan. *The Los Angeles Times*, June 12, 2005. (<https://www.latimes.com/archives/la-xpm-2005-jun-12-fg-bookban12-story.html>) (2005).
- ⁶⁾ Mori, K. A comparison of amusingness for Japanese children and senior citizens of *The Story of Little Black Sambo* in the traditional version and nonracist version. *Social Behavior and Personality*, 33(5), pp.455-466 (2005b).
- ⁷⁾ Mori, K. Assessment of the implicit attitude of Japanese people toward blacks and *Little Black Sambo*. *Open Journal of Social Sciences*, 6, pp.1-13 (2018).
- ⁸⁾ World Economic Forum. *Global Gender Gap Report 2020*. (http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2020.pdf) (2019).
- ⁹⁾ 秋田 真, 小学校主権者教育におけるIATを用いた潜在的な女性観抽出の試案-クォータ制を用いた価値判断を通して-『松本大学研究紀要』第19号, pp.83-90(2021).

- ¹⁰⁾ Nike Japan『動かさしづける。自分を。未来を。The Future Isn't Waiting.』(YouTube https://youtu.be/G02u6sN_sRc) (2020).
- ¹¹⁾ 三船恒裕・横田晋大, 社会的支配志向性と外国人に対する政治的・差別的態度：日本人サンプルを用いた相関研究. 『社会心理学研究』第34巻第2号, pp.94-101(2018).
- ¹²⁾ 山本健太郎, 『国交正常化から50年の日韓関係一歴史・領土・安全保障問題を中心に―』国立国会図書館 調査及び立法考査局(2015).
- ¹³⁾ 高 史明・兩宮有里, 在日コリアンに対する古典的 / 現代的レイシズムについての基礎的検討. 『社会心理学研究』第28巻第2号, pp.67-76(2013).
- ¹⁴⁾ McConahay, J. B. Modern racism, ambivalence, and the modern racism scale. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner(Eds.), *Prejudice, Discrimination, and Racism*. Academic Press. pp. 91- 125 (1986).
- ¹⁵⁾ 内田昭利・守 一雄, 『中学生の数学嫌いは本当なのか：証拠に基づく教育のススメ』北大路書房 (2018).
- ¹⁶⁾ Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), pp.1464-1480 (1998).
- ¹⁷⁾ Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., & Stewart, B. D. An inkblot for attitudes: affect misattribution as implicit measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89(3), pp.277-293 (2005).
- ¹⁸⁾ Nosek, B. A., & Banaji, M. R. The Go/No-go Association Task. *Social Cognition*, 19(6), pp.625-666 (2001).
- ¹⁹⁾ Mori, K., Uchida, A., & Imada, R. A Paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, 40(2), pp.546-555 (2008).
- ²⁰⁾ Mori, K. & Uchida, A. Paper-based Affect Misattribution Procedure for Implicit Measurement. *Psychology*, 6, pp.1531-1538 (2015).
- ²¹⁾ Monin, B., & Miller, D. T. Moral credentials and the expression of prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(1), pp.33-43 (2001).
- ²²⁾ Face App(<https://play.google.com/store/apps/details?id=io.faceapp&hl=ja&gl=US>)
- ²³⁾ Samsung Gallery(<https://play.google.com/store/apps/details?id=com.sec.android.gallery3d&hl=ja&gl=US>)
- ²⁴⁾ 東京大学新聞(2018). 五神総長、なぜ女子学生に対する家賃支援を始めたのですか？『東京大学新聞』2018年6月7日 (<https://www.todaishimbun.org/soucho20180607/>)
- ²⁵⁾ 守 秀子. 大学生における性役割認知の変化.
- 『文化女子大学長野専門学校研究紀要』第2号, pp.19-32, (2010)